

文学部が消える?



塩村 耕

世の中から大学の文学部が消えつつある。長らく続く不況の中、文学部は就職に不利との風評から受験生を減らし続けた。実学重視の風潮も逆風となり、多くの大学の文学部が実務的な名前の学部に転換した。さるに一九九一年に大学設置基準が変わり、どこの大学でも教養部がなくなり、人文学系の研究・教育職のポストが激減した。入り口と出口の両面を封鎖され、文学部は久しく青息吐息の状況にある。

さらに大学内でも苦戦をいりながら、人文学の諸分野は短期的な成果が難しく、年度内の論文本数では測りにくい。書籍購入費以外に研究費を要することも少なく、獲得した外部資金の金額でも評価できない。

このまま事態が推移するならば、文学部に進もうとする若者はますます減少し、人文科学の継承は困難となる。それは文学部関係者だけの問題ではない。その国人文学の疲弊は、国全体の潜在力の低下をまねくからだ。

実は、文学部や文学部がになう人文学は、「無用の用」というような玄妙なレベルで

はなく、現実的に有用であるはずだ。

たとえば、文学部のうち、われわれの日本文学研究室が何をやっているかというと、主に過去を生きた人たちが残しててくれた文献について、古いことばの用法や意味を調べ、記述の背景にある社会の

名古屋大大学院文学研究科教授。1957年神戸市立大学院生院卒業。東京大卒、同大学院退。相山女学園博士課程中退。専門は日本近世文学研究。著書に「近世文学研究」など。名古屋市在住。

これが文学部の文明史的な任務なのだ。

(基本的な教養科目)は、ギリシャ・ローマ以来の伝統や

そのような体験は、人の心の動きについて敏感な、味わいある人間性をも育てるはず

で、それが現実社会での人間関係に役立つことはいうまでもない。企業の人事担当の方には、文学部卒業生を積極的に採用していただきたいもの

である。

システムを把握し、文脈のある可能性を吟味し、要するにできるだけ同時代に即して、古人が何を語ろうとしたのかを読み取ろうと格闘して「リベラルアーツ」とテクノロジーの交差点」という有名

アップル社を創業したステイーブ・ジョブズ氏は、自分たちの仕事がなされた場として「リベラルアーツ」とテクノロジーの交差点」という有名なことばをのこした。もっとも、欧米のリベラルアーツ

を重視されている。それはリベラルアーツに匹敵する教養そのもので、産業界での成功に必要な視野の広さや大局観と無関係ではないまい。

そのほかの現代的な課題、たとえば脳死の問題を考えるためには、日本人の伝統的死

生觀の吟味(「死ぬ」の語義や魂が体のどこに宿るかななど)

は不可欠だし、隣国とのあるべき関係を探るには、徳川時代に久しく続いた善隣友好関係を参照することは必須だと思われる。文学部や人文学の

社会的役割は、学問や教育だ

実学重視の風潮逆風

深い教養こそ企業に必要

大波小波

九十七歳で長逝した大西巨人は、最後の戦後派であるとともに、近現代日本文学史上最も長く生き、活動した小説家の一人といえよう。長男の大西赤人が責任編集者の雑誌『季刊メタボゾン』十号には、戦後文学と政治をめぐる元気な応答が載っている。「現役」で

あり続けた意志と持続力は、短命の打ち上げ花火が称賛されがちな文学界では異例の輝きを放ち続けた。しかし、大西巨人の活躍

「大西巨人追悼」(『すばら』五月号)での主張だ。新作のウェブ連載、コンテンツの無料提供など情報社会への大西の対応の早さは

あり続けた意志と持続力は、短命の打ち上げ花火が称賛されがちな文学界では異例の輝きを放ち続けた。しかし、大西巨人の活躍

「大西巨人追悼」(『すばら』五月号)での主張だ。新作のウェブ連載、コンテンツの無料提供など情報社会への大西の対応の早さは

あり続けた意志と持続力は、短命の打ち上げ花火が称賛されがちな文学界では異例の輝きを放ち続けた。しかし、大西巨人の活躍

「大西巨人追悼」(『すばら』五月号)での主張だ。新作のウェブ連載、コンテンツの無料提供など情報社会への大西の対応の早さは

三月十六日の日曜日。信愛書店がある東京・西荻窪の神明通りは、毎月第三日曜の恒例行事「あさ市」で賑わっていた。野菜、菓子、アジアンフードなど

ばほどの区間でそれぞれの店が声を張り上げ、道行く人々の足をとめさせる。

店の本屋

石橋 毅史

30

けにとどまらないのである。遅まきながら、文学部をめぐる現状に一矢を報いようとしたのが、公開シンポジウム「文学部の逆襲」だ(三月八日、名古屋大文学部)。幸い予想以上に多くの来場者がおり、ブログやツイッターで

の反響も大きかった。この刺激的なテーマは世の人の心を惹いたらしい(詳細は追って作成公開する予定の報告書を参照してほしい)。今後、各方面で文学部や人文学のもう一つ意義について、議論が深まることを期待したい。



閉店選んだ老舗⑤

信愛書店は、二年前から会長を務めている。社長の原田福夫は本や雑貨を並べた

信愛書店がある東京・西荻窪は、毎月第3日曜、「あさ市」で賑わう。現在、原田直子の最大の関心事は、この地域を楽しく、助け合える暮らしの場にする」と

「本」から離れるつもりではなく、むしろこれからではなくしてデビュー作はなかつたという阿部和重の、

が、暴露と明確化の運動とが、当たり前となつていて、小説の在り方に鋭く突き刺さり、変更を迫る見方ではあるまい。(反俗情派)

「本」から離れるつもりではなく、むしろこれからではなくしてデビュー作はなかつたという阿部和重の、

が、暴露と明確化の運動とが、当たり前となつていて、小説の在り方に鋭く突き刺さり、変更を迫る見方ではあるまい。(反俗情派)